

Lutone...

ルトネ
2021
冬
No.002

伝統を織る

佐賀錦
— 麓刑務所



Photo by R.Yamaoka



Lutone...

No.002

和紙と糸が織りなす

佐賀の伝統工芸

佐賀県の伝統工芸として知られている「佐賀錦」。経糸は和紙で、緯糸に絹が使われていることはご存じだろうか。

佐賀錦は、江戸時代末期 肥前（佐賀県）鹿島藩鍋島家の女性たちの苦心による創出であるといわれている。

起源には諸説あるが、江戸時代末期に鹿島家九代目藩主夫人が病床の折、見上げた天井の網代組（あじろぐみ）に心打たれて考案したものと伝えられ、その後、歴代藩主夫人により工夫と改良が重ねられて技法が確立された。

明治時代には、佐賀県出身の大隈重信侯により旧華族の間に佐賀錦が広まるなど再び注目が集まるや、明治四十三年、日英大博覧会に出品され、「日本手芸の極致」と賞賛を受けた。

佐賀県鳥栖市 麓刑務所

ここでは、昭和六十年から、受刑する女性たちにより佐賀錦が織り続けられている。

今回は、佐賀錦を通して刑務所と地域社会をつなぐ人達を追った。

刑務所製の佐賀錦

物も技術も心も大切に。

つないできた思いが分かるんです

縁あって昭和六十年から、母と二人で麓刑務所に通い、受刑者四人と一緒に始めました。

刑務所は怖いところという印象がありましたが、行ってみると想像以上に整った生活をしていて安心したことを覚えています。

佐賀錦は、技術を身に付けることが難しい。誰にでもできるものではないんです。でも、選ばれた人が地道に取り組んでくれて。やがて一般にも販売できるようになり、徐々に多くの方に購入していただけるようになりました。とても嬉しく、私たち自身も大きな励みになりました。

刑務所はとても物を大切にしている。通ったからこそ分かったことです。糸や材料を大切に使い、普通なら捨ててしまうような切れ端でも工夫して無駄にしないよう大切にしていることに感心しました。模様凝ったり、色を変えながら手間ひまを掛け、限られた環境の中でこれだ

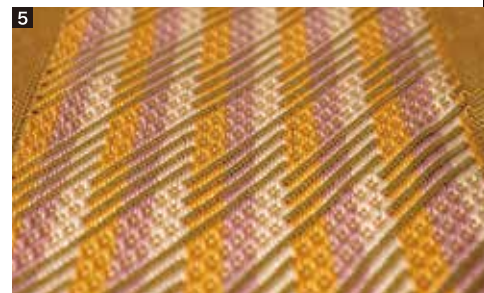
けのことができるということは素晴らしいことだと思います。

海外でも佐賀錦を織っている方がいると聞きますが、年々佐賀錦の織手は減っているのが現実です。機械織りの佐賀錦も多く、技術の継承が難しいですね。昔に近い織り方を続けている麓刑務所にその技術は残るかもしれない。昭和六十年から何人もの受刑者がつないできた思いが、麓刑務所の佐賀錦からは伝わってくるんです。



技術指導者 井手さん

佐賀錦の保存と技術の継承を目指すNPO法人「佐賀錦紗綾(さや)の会」理事長。佐賀錦の歴史などをまとめた本「佐賀錦の形2」(A4判、60ページ)を出版している。



1) 佐賀錦織ブローチA型 2) 佐賀錦織ネクタイピン 3) 佐賀錦織ヘアカフ 4) 佐賀錦織ハンガー 5) 受刑者が織った佐賀錦の生地 (いずれも麓刑務所製)



もう今は、ほどいたり、なかったことにはしないんです。(女子受刑者Aさん)

佐賀錦を織るよう言われたとき、実はすぐ嫌でした。

少しずつ始めて、最初に織り上げた製品には満足できなかったけれど、同じ工場の人たちにお披露目したら褒められて。すごく嬉しかった。次は今より良い物が織れるかもしれない、そう思いました。

良い製品が織り上がったとき、それを見た先生の目がキラキラと輝くんです。冷たい気持ちで織った製品には反応にきらめきがない。製品の良し悪しも、作業への向き合い方も全部伝わってしまいます。

台から織り上がった佐賀錦を外したら、生地が生きているような動きをするんです。織った人にしか分からないことかもしれないけど、そう思うようになってからは途中で止めたり、ほどいたり、なかったことにすることができなくなりました。前の自分だったらほどこいていただろうし、誰も見ていなければ分からないことだけど、生きているからできない。どんなことがあっても最後まで織りきらなければと思うんです。



受刑者の思い

材料の表情がわかったとき
気がついた自分自身の変化 (女子受刑者Bさん)

この作業を始めてから二年になります。最初は失敗したらどうしようかと、とても緊張していました。

革にはそれぞれに表情がある。縫う時の強さを変えながら、一枚一枚縫うのは難しいけど、面白い。こんなふうに見えるようになったのは一年以上経ってからです。いろんなことに余裕を持って見られるようになってから。

ここでの生活と作業を通して、行動する前にひと呼吸おけるようになったと自分自身の変化を感じています。



辛抱を乗り越えた後の喜びを 母親として生きていくことの自覚を

指導しながらも、日々の小さな成長を認めて褒める。私たちの仕事はそんな毎日の積み重ねです。

彼女たちには何より規則正しい生活を身に付けてほしい。そして子どもがいる人には、母親として生きていくことを真剣に考えてほしい。

それを乗り越えると、受刑者の表情が生き生きとしてくる。楽しんで、やりがいを感じ、自発的になる。それを感じる瞬間が私のやりがいでした。

作業を始めた最初の一年は眉間に皺を寄せ、少し作業を進めては手を止めて、じっと手元を見つめる。その繰り返しでした。美しい佐賀錦は、慣れるまで一日数センチしか織ることができない辛抱がいる地道な作業なんです。



山内看守部長

革製品導入時の工場担当。
家族のため社会のために少しでも犯罪を減らしたい、その思いから刑務官に。20数年が経った今もこの思いは変わらない。

人は「何に会おうか」が大事 愛情は与えることも受けることも大事

佐賀錦や革製品は、専門的な作業なので少人数でやっています。製品を見たことがない受刑者もたくさんいるので、仕上がった時はお披露目会をするんです。作った人は皆から褒められると何とも言えない嬉しそうな表情になります。こういう経験から、やりがいや自分の役割を見つけてほしいと思います。

その人の得意なことが作業の中で生かされた時、自然と表情が生き生きときます。何に出会おうかが大事なんだと感じる瞬間です。

受刑者には、人それぞれ何かしらの弱い部分があって、その弱い部分を理解し、変えていくとすることが必要だと思うんですね。

人は一人では生きていけないから、人間関係を大切にしてほしい。生きていく上で愛情を与えることも受けることも大事なことですよね。だから、相手ではなく、「自分はどうかんだ」という所に目を向けてほしいと思っています。



第一工場担当 山口看守部長

佐賀錦・革製品を製作する工場担当。
刑務官は「人を育てる仕事」。採用時に言われたこの言葉を、今も大切にしている。



おもい 人からひとへ 伝統をつなぐ

佐賀錦の指導を担当することになったときは、すごく悩みました。でも「やらない」という選択肢はなかった。だって彼女たちに伝えられることがたくさんあるから。やるとなったら、真剣勝負。「生活の中で身近に感じられるものを」と、洋服でも身につけられる革製品と一緒に加工することにしました。

ただ私の専門は洋裁。佐賀錦も革も素人同然。民間の専門家に指導をお願いしたら、「毎日指導できないのでは意味がないから、あなたが習いに来なさい」と言われ、それ以来今でも習いに行っています。

麓刑務所の佐賀錦と革製品は全てハンドメイドです。今も昔の技法を忠実に、彼女たちが織った佐賀錦と、彼女たちが縫い合せた革で仕上げています。平成二十七年に法務大臣表彰を受賞したときは本当に嬉しかったですね。受刑者と一緒になって喜びました。彼女たちは苦労したと思いますが、「これだけやればこんないいものができるんだ」という、私が一番伝えたかったことを伝えることができた。大切な思い出です。

佐賀錦は難しい作業。受刑者は、最初は引っ込み思案で、できないことも上手く言えない。でも辛抱強く指導を受けて、できたことを認められ、褒められることが少しずつ増えてくると、技術が身に付き、表情も明るくなります。紆余曲折はありますが、投げ出さず、頑張っている姿に感心するときもあります。佐賀錦は古い資料も残されている大切なものです。伝統を途切れることなく引き継いでいきたいですね。



古川作業専門官

教員として働いていたとき、洋裁技術を専門に指導する「作業専門官」という仕事を知り、一念発起で転身。採用から19年間、作業することの楽しさとやりがいを伝え続ける技術指導のプロフェッショナルだ。

ふるさと納税謝礼品 鳥栖市

認められ、
受け入れられるために

麓刑務所の武道場を災害時の避難所にしようと防災協定を結んだ際に、私どもから「佐賀錦」をふるさと納税の謝礼品に採用したいとお話させていただいたのが縁です。

誰でも一緒だと思いますが、周から認められたり受け入れられるとやる気が出て頑張りますよね。麓製の佐賀錦を謝礼品に採用することで、前向きな受刑生活を送る支援になればと考えました。

私は犯罪被害者の方への支援も行っていて、直接お目にかかってお支えることがあります。人々の生活の場である地域社会では、双方に必要なケアを提供しながら、安心安全な「まちづくり」を目指していくことが大切だと考えています。



鳥栖市役所
総務課 古賀庶務係長



鳥栖市ふるさと納税謝礼品
「佐賀錦タイピン2点セット」
(平成30年度末から採用)

社会とのつながりを
感じてほしい

佐賀錦の素晴らしさをたくさんの人に伝えたくて、長年、手に取りやすい製品の開発を思案していました。でも折り合いが付かず、最後は自分で織ろうかと考えていたとき、偶然、麓刑務所の佐賀錦と出会いました。五年前のことです。それから生地を提供を依頼するようになりました。初めて見た時は綺麗だと思いましたね。今でも覚えています。

平織りの方が簡単に織れると思うんですけど、麓製は手間ひま掛けて工夫しているのが分かります。織る人は大変なんじゃないかな。見る方は嬉しいんですけどね。

自分の織った物が社会に出て行って、誰かの生活を潤している。今は社会から離れているかもしれないけれど、小さくても温かい社会とのつながりがあることを感じてもらえれば嬉しいですね。



MITSUZE-CRAFT

代表 山口さん

佐賀市に拠点を構える個人工房。革製品を中心に独創的なモノをインターネットで販売している。お問い合わせはメールにて。yama@mitsuze.com



編集後記

鍋島家の女性たちにより創出された佐賀錦。その後も、多くの女性に守られ受け継がれてきた伝統が、三十六年間、麓刑務所の中でも守られ受け継がれていた。

「良い品質で信頼される製品、なおかつ美しく」を心掛け、手にとってくださる方のことを思う。

取材して知った伝統だけではなく、佐賀錦への思いを、これからも見守っていきたい。

お問合せ先

麓刑務所

佐賀県鳥栖市山浦町2635

TEL:0942-83-9196(作業担当直通)



Lutone...

2021・Winter
No.002

ルトネ 冬号

－ 取材先 －

麓刑務所
鳥栖市役所
佐賀錦紗綾の会
MITSUZE-CRAFT

－ 表紙撮影 －

友泉亭公園(福岡市城南区)

－ 企画・取材・編集 －

福岡矯正管区成人二課
コレワーク九州
福岡刑務所

－ 発行 －

福岡矯正管区

〒813-0036
福岡県福岡市東区若宮5-3-53
TEL:092-661-1138(直通)